

## 子どもの残酷性について

○竹田 有希 島田 ミチコ  
(幸和園保育所) (聖和大学)

### 1. はじめに

子どもがアリを踏み潰したり、バッタのアシをむしり取ったりしている場面をよく見かける。保育場面でもそうした行動を見かけることが多い。子どもの残酷な行動は成長発達する上で大切な通過点といわれるが、そうした残酷な行動が、子どもにとってどのような意味を持つのであろうか。

子どもの残酷な行動そのものの理由や意味を調べるとともに、保育者としてどのように関わっていけばよいのかということを検討したい。

### 2. 残酷性とは

#### (1) 心理学から見る攻撃

心理学的研究を基に攻撃の発生を考えると、①本能説②欲求阻止—攻撃説③社会学説の3つの説が挙げられるが、その中でも本能説に注目して見ていく。

##### 1) フロイト

あらゆる生物の目的は死であるとして「死の本能」を唱えた。これは本来自分自身に対して向けられるものであるが、生命が続く限りは生命保持に必要な条件として、他のものへ方向転換を行い、その結果、攻撃・破壊という行動のエネルギーの供給源になるとした。

##### 2) ローレンツ

攻撃行動は種を保つ「本能」であり、だからこそ危険極まりないと唱えた。本能行動を解き放つことなくせき止めた場合、はるかに深刻な形で現れるとした。その為、攻撃を他のものに向けてることによって攻撃を無害な方向へ導いていくことが必要であると提唱した。

これらのフロイトやローレンツの考えをもとに、残酷性は攻撃の中における本能説に含まれるものとして本研究を検討したい。

#### (2) 残酷性の具体例

昔の子どもたちの遊びを思い出してみると、ミノムシのミノから中のムシを潰さないように押し出して遊ぶというものがあつた。上手いかずに中のムシを潰しても、そこで止めることなく何度も繰り返して遊んでいた。この他にもアリを動かなくなるまで踏み潰したり、バッタのアシをひきちぎったりという行為は、子どもの行動を観察する中でよく見かけることである。

「死んでしまったら二度と生き返らない」というような死・生の概念は無く、興味・探究心に支配されたものである。子どもが小動物と残酷な遊びに興じている時、小動物に対する思いやりがまったくないとは言いつ切れない。「足で踏んづけると死んじゃうかな」「足を1本ちぎると痛いかな」といった感情はどこかで持ちつつも、「足はどのようにしているのだろうか」「羽は何枚ついていてどのように動かすのだろうか」など具体的な事実に興味・関心があり、感情よりも探究心のほうがはるかに勝っているのである。一般に大人から見て「かわいそう」と感じたり、「どうして」と思ったりするのは幼児期に様々な経験や学習を積み重ねてきた結果である。

#### (3) 生命感を持たない子どもたち

- ・ゴソゴソ動いていた毛虫が急に止まったのを見て、「先生、電池入れて！」(二歳男児)(1)
- ・鉄の門をはうカタツムリを指して、「中が磁石になつとんやなあ」(三歳男児)(2)
- ・園庭でバッタを見つけて、「バッタおったよ。」「あ、あかんわ、そおと持たな空気ぬけてしまうわ」(五歳男児)(3)

これらの事例から考えることは生命感のなさ、子どもたちがいかに機械に囲まれて暮らしているかということである。大人たちから残酷であるとされる遊びを充分体験してきた子どもたちであれば生き物が電池や磁石、ましては空気などではないということを認識しているであろう。生まれた時から当たり前のものとして機械に囲まれ、生き物との経験も無ければある意味仕方の無いことなのかもしれない。

残酷と言われる遊びの中から知らず知らずのうちに生体についても学び、それが生命感にも繋がっていくのではないかと考える。そしてこのような行動を何度も繰り返すことにより、生や死というものの実態やその意味などを学んでいくのではないだろうか。子どもたちから残酷な遊びの経験を奪うということは生命感の育ちの場も奪ってしまうことにもなると考える。

#### (4) 「子どもらしい」残酷性

人間はもともと「残酷性」のようなものを持ち合わ

せている。それが顕著に現れるのが幼児期なのではないだろうか。幼児期に様々な生き物の扱いを通して残酷性をコントロールする方法を身につけていくのではないかと考える。

今日、自然環境的にも生活環境的にも生命を経験する機会・場が失われつつある。また、生き物はお金を出して買う物となりおもちゃやゲームと同じような無機的なものとして捕えられている。昔の子どもたちは自然界の中で共存しながら生きてきた小動物との体験から多くの学びを得てきたが、今や小動物を動く玩具として家庭の中での体験へと変化してきた。これらの違いは子どもの生命感に大きな変化をもたらした。死を知ること、生命に対する畏敬、慈しみ、いとおしむといった気持ちを育てることは、人間を育てることにつながっていくと考える。残酷な遊びは人が必ず通らなければならない一つの発達過程であり、最も適切な時期に子ども特有の残酷性をおびた体験を重ねさせ、人間らしい、人間としての心を育てることに意義を見るのである。

### 3. 昔話から見る残酷性

#### (1) 昔話から消える残酷性

子どもの身近にある昔話の中にも残酷性は存在するが変えられた話が世間に広く知れ渡っている為、知っているようで実際にはあまり知らない人も多いのではないかと考える。もともと昔話は文章だけで、子どもの身近にいる大人たちの口から直接語られるものであった。しかし、現在私たちが出会う昔話は絵本になっているものがほとんどである。そこで残酷な場面を絵にすることにより、聴覚だけでなく、視覚によっても子どもたちに訴えなければならなくなってしまったところに、もともとの話が変化することとなった要因の一つがあるのではないかと考える。

#### (2) 残酷性—昔話の果たす役割—

昔話はどのような役割を果たしているのであろうか。

##### ① 善悪をはっきりさせる

##### ② 中身を抜いて語る

決して具体的に内容を語らず、事実のみを淡々と語り、読み手の想像に委ねている。

##### ③ 人間・人類の様々な側面を語っている

人間の良い面も悪い面もまるごとひっくり返して語っている。歴史的事実も含まれており、人間の持つ残酷性を隠すことなく事実は事実として語り伝えている。

##### ④ 自然の本当の姿を語っている

生き物は自分の生命を守る為、維持する為に他の動物や植物を殺す、食べるという事実を述べている。他の命を頂いたもの、ということを感じることが少なくなった現代だからこそ、人間も生態系の一部にすぎないということを忘れない為に大切な意味をもっているのではないかと考える。

##### ⑤ 昔話を通して間接体験を行う

主人公と一体になり、悲しさ・怖さ・苦しさ・喜びなど数多くの感情体験・冒険を行い、豊かな心を育む。

### 4. 「生命」を大切に感性を育てるために

上記のことをふまえ、保育者としてどのように関わっていけばよいのかということを考える。

#### ① 愛がなければ残酷さは単なる残酷さに過ぎない

昔話は直接の語りによって伝えられることにより子どもたちは愛する人の確かな存在を感じることができる。昔話を語る時、愛情をことばにのせて欲しい。

#### ② 保育者が死や生命に対してどのように考えているか

「いのちに気付く・ふれる」経験の保障と共に保育者が死や生命をどのように考え、生命に対する畏敬、重みを感じながらどのように日常生活を送っているかが重要であり、子どもたちの感じ方、考え方に影響を与える。

#### ③ 保育者の価値観を基にモラルを形成していく

子どもたちのしていることに対してどのように感じているのか、どのような結果になってしまったのかを伝えていくことで概念の獲得を促していく。残酷な遊び、間接体験を積み重ねていく中で感情と概念が一致する時が訪れ、その時に「死」の重み・「生命」の重みを感じることができるのではないかと考える。保育者は欠かすことのできない経験とモラルの二つの要素に関わり、幼児に伝える役割を担っている。

### 5. おわりに

幼児期において、自然界の小動物を通しての残酷な体験を積み重ねることは、後の情緒的な発育はもとより、人との関係、物との関係を豊かなものにしていくと考える。そのために、子どもたちの残酷な遊びがあり、また昔話の世界が重要な意味を持つてくる。

保育者は幼児期の残酷な遊びを肯定するとともに、成長後のモラルについて、幼児に伝えるという役割も担っている。特に歴史のある昔話、童話には大人の世界以上に残酷性をテーマとした物語が多く展開している。今後、昔話、童話の内容について深く検討していくことを研究課題としたい。